北海道縄文世界遺産推進室からのお知らせ

北海道外での活動報告

2023年１月29日に、縄文遺跡群世界遺産本部主催の「北海道・北東北の縄文遺跡群世界遺産登録１周年記念東京フォーラム」が開催されました。

フォーラムの当日の様子は、YouTubeにより配信されています。「縄文遺跡群チャンネル」でご検索ください。

【講演】

「縄文遺跡群の世界遺産登録の意義」

文化庁文化資源活用課文化財調査官　鈴木地平氏

「世界遺産登録の歩みと縄文遺跡群の未来」

縄文遺跡群世界遺産協議会長

三内丸山遺跡センター所長　岡田康博氏

【意見交換】

「ドキュメント　こうして世界遺産になった縄文遺跡群」

・縄文遺跡群世界遺産本部顧問
　早稲田大学名誉教授　菊池徹夫氏
・縄文遺跡群世界遺産専門家委員長
　筑波大学名誉教授　稲葉信子氏
・文化庁文化資源活用課
　文化財調査官　鈴木地平氏、
・縄文遺跡群世界遺産協議会長
　三内丸山遺跡センター所長　岡田康博氏

2023年２月に大阪・東京において「北の縄文」をＰＲするイベント「Welcome Jomon in Hokkaido」を開催しました。

会場では、国宝・中空土偶「カックウ」のレプリカをはじめとして、北海道内の重要文化財のレプリカたちが、お客様をお出迎え。

縄文時代の衣装をまとって写真撮影ができるARフォトや、アンケートに回答することで参加できる縄文ガチャを用意しました。

なかでも人気があったのは、オリジナルトートバッグ作り。札幌国際大学縄文世界遺産研究室の皆様のご協力をいただき、期間中各日先着100名様にご体験いただきました。自分だけのオリジナル縄文トートバッグづくりは、子供から大人まで誰でも参加可能な体験ということもあり、終了時間を待たずして各日とも終了となりました。「北の縄文」をより多くの方に知っていただけるよう、今後も魅力発信を進めてまいります。

北の縄文道民会議　荒川代表が行く！

北の縄文文化回廊を巡って【第２回】

北東北の縄文の旅は、青森空港着・発の二泊三日、実質二日半の行程でした。岩手県、秋田県はその二日目、かなり強い雨の中のドライブとなりましたが、遺跡を歩く段になると小降りとなり、なにか縄文の神様に守られているような気がしました。この日訪れた３つの遺跡は、深い山々を越えてやっとたどり着く「山の縄文」です。縄文時代が終わると、この地域には寒冷化とともに北海道の続縄文文化が南下しましたが、今も古いアイヌ語に由来すると考えられる地名が多く残っており、弥生文化が早い段階で北上してきた東北南部とは自然条件の大きな違いを感じます。

Ⅱ　岩手県、秋田県

1　御所野遺跡（岩手県一戸町）

御所野縄文博物館と縄文公園への入り口は、あたかも時を遡るタイムトンネルのようなデザインとなっており、展示の仕方を含め、遺跡整備への町の意気込みが伝わってきます。

遺跡に続く「きききのつり橋」

この遺跡は、ステージⅡの後半「拠点集落の出現」の4500年から4000年前を示す資産で、山間部の河岸段丘上に立地しています。周辺で石器の材料となる頁岩が採れ、温暖期の川や山の幸を糧に集落が展開しました。

ここでは、発掘調査や住居の火災実験の成果から、竪穴住居が土で覆われた土屋根構造だったことが証明され、その知見に基づいて遺跡公園が整備されています。復元住居の劣化を防ぐためもあって、実際に炉の火を燃やし続け、内部を煙で燻していました。ムラのゾーンにはクリの木を植え、石斧で伐ったクリ材で列柱や建物を復元するなど細部にまでこだわった調査研究と展示が行われています。

博物館では、プロジェクションマッピングを使って当時の四季の暮らしの様子が可視化され、展示されている土器の模様や形、土面などには美術的な要素を強く感じました。

復元された土屋根の竪穴住

鼻曲がり土面

「北海道・北東北の縄文遺跡群キッズサイト JOMON ぐるぐる」より

開放感のある明るい建物の中にあるミュージアムショップでは、買い物をすると無地の紙袋を渡され、それに縄文模様や動物・植物形などのスタンプを自分で押す、という楽しい仕掛けも用意されています。知識が豊富なボランティアガイドの方のホスピタリティもあり、とても魅力的なところでした。

2　大湯環状列石（秋田県鹿角市）

御所野を出発し、豪雨の中、山あいの高速道路を通っての移動となりましたが、北海道の高速道路と比べるとアップダウンが多く、深く険しい山地であることを実感しました。現地に着いた時は土砂降りで、まずは遺物を見るためストーンサークル館に駆け込みました。

大湯環状列石は、ステージⅢの前半「共同の祭祀場と墓地の進出」、寒冷化した4000年から3500年前を示す資産で、青森県、岩手県との県境に近い鹿角市の台地上に立地しています。資料館を出ると雨はほぼ上がっていて、幹線道路を挟んで隣接する直径52mの「万座」と直径44mの「野中堂」の二つの環状列石を散策することができました。これらの位置関係は、上空からの画像だとよく分かりますので、ぜひ縄文遺跡群の公式サイトをご覧いただきたいと思います。夏至の太陽が二つの環状列石を結ぶ線上に沈んでいく画

像がとても感動的です。

上：万座環状列石
下：日時計のような配石遺構

環状列石の内側にも外側にも、日時計のように石の柱を円形に囲むたくさんの配石遺構が立っており、太陽の動きとの関係、あるいは子孫繁栄への強い願いもあるのかもしれません。

大湯ストーンサークル館には、突起が異様に伸びた独特の土器のほか、キノコ型や中が空洞の鐸形土製品など、様々な祭祀の道具が見られ、この場所が祈りの場であったことが分かります。有名な「数の土版」は、天体の運行も把握していたと言われる当時の人々の数の概念が伝わる貴重な遺物です。

左：「どばんくん」。口が「1」、目が「2」、胴体に「3」「4」「5」。
裏側には「6」も。
右：たくさんの鐸形土製品

温暖な時代が終わって寒冷化が進む中、太陽の力は弱まったとは言え、夏至には力を取り戻します。その恵みのもとで植物も動物も生まれ育ち、人も糧を得ながら世代をつないでいく、そういう命の「再生」と「循環」が続くことを祈らずにはいられなかったのではないか。そんなことが想像されます。

3 伊勢堂岱遺跡（秋田県北秋田市）

伊勢堂岱遺跡は、秋田県の内陸部、大館能代空港に近い北秋田市の河岸段丘上に立地しており、大湯環状列石と同じ段階の4000年から3700年前を示す資産です。

人気の板状土偶「いせどうくん」

歩いただけではなかなか全体像はつかめませんでしたが、直径が最大のもので45mの環状列石が4つ隣接しており、これらは共同墓地であり、祭祀・儀礼の場でもあったと考えられています。

ここの面白さは、何と言っても土偶をはじめとする祭祀道具の展示です。特に、土偶のバリエーションには驚くばかりでした。板状土偶の「いせどうくん」は縄文館のシンボルで、とても愛嬌のある顔に見え、これをかたどったドングリ入りのクッキーも販売されています。土偶ではありませんが、笑っているような表情の岩偶。胸が強調された土偶や遮光器土偶など多彩な土偶が見られ、どの土偶が好きか、人気投票も行われていました。展示にはこういう楽しさも大切だと思います。

ユニークな土製品の数々

動物型土製品は、他の遺跡でもしばしば見られますが、ここのものは比較的リアルで、一見して猿やイノシシだと分かります。キノコ形の土製品は各地の遺跡から出てくるもので、縄文人は秋の味覚「きのこ汁」が大好きだったのでしょう。また、食べられるキノコを見分ける教材だったという説もあるようです。ただ、祭祀の場である遺跡から出てくるということは、キノコは森の恵みを象徴する精霊のような存在として捉えられていたのではないか、以前はよく森に入ってキノコ採りしていた私にはそのように思えます。（つづく）

北の縄文

北の縄文ロゴマークで縄文を盛り上げませんか

道では、北の縄文ロゴマークの使用基準を定めました。このロゴマークは、北海道全域に存在する縄文遺跡・文化のシンボルとして、制作物、媒体等に広く使用することで「北の縄文」の認知度を高めるとともに、未来へ引き継ぐ取組を推進するために作成しました。

北の縄文の普及啓発に寄与するものに使用することとし、ポスター、パンフレット、チラシや広報誌、封筒や名刺などの媒体に使用できます。

使用を希望する場合には、「北の縄文ロゴマーク使用承認申請書」をご提出いただく必要があります。

詳細は、「北海道環境生活部縄文世界遺産推進室ホームページ」をご覧ください。

このロゴマークは、北海道の縄文文化の魅力や価値を広く発信するためのキャッチフレーズ
「未来へつづく、一万年ストーリー。」
を表現したものです。

北の縄文展 in 浦幌

2月18日から浦幌町立博物館において「北の縄文展 in 浦幌」を開催しました。世界遺産「北海道・北東北の縄文遺跡群」や道東の縄文遺跡を紹介するパネルのほか、初公開となる浦幌町の出土品の展示も行いました。また、3月18日には縄文世界遺産推進室の村本主査による講演「縄文世界遺産と浦幌町の縄文」と展示解説を行い、たくさんの方に北の縄文の魅力をお伝えすることができました。令和4年度は、余市町、釧路市、網走市を含め4カ所で「北の縄文展」を開催することができました。令和5年度も「北の縄文」の魅力を発信してまいります。